

## „Mitläufer“ 「同調者」 について考える

—映画『ゲッベルスと私』<sup>1)</sup>を手がかりとして—

勅使川原 聖子

はじめに

„Mitläufer“ということばは、多くの場合、ナチ時代やホロコーストのような犯罪とともに使用または想起される語であり、そこにはネガティブな意味合いが含まれている。日本語では、通例、「同調者」と訳されるこのことばのもつ意味は、実際はナチズムの過去の歴史だけに限定されたものではなく、本来、どの時代、どの世界、どの組織においても普遍的な意味を持つものであり、また特殊な人のみに当てはまるのではなく、誰でもそうなり得る可能性のある立場を表してもいる。

本小論では、改めて„Mitläufer“とはいかなる存在であるのか、過去と現在を含め、愚直に考察することが目的である。

また、これは戦後ドイツの思潮や文学作品等の理解を深める上での試みでもある。例えば、ギュンター・グラス (Günter Grass, 1927-2015) の代表作である『ダンツィヒ三部作』 („Danziger Trilogie“) <sup>2)</sup> は、この「同調者」の世界を巧みに描いた小説群として評価され、広く知られている。左記に限らず、ナチス時代と関連を持つ作品や研究の集積は、戦後ドイツ文学や思潮の特殊性でもある。こうした潮流を理解する一助として、文字情報・表現を補完する目的により、映画を通じたアプローチを図る。この考察に際して、2018年6月16日から8月3日まで東京の期間、東京の岩波ホールで上映され、日本各地で順次公開されている、映画『ゲッベルスと私』(日本公開原題は „A GERMAN LIFE“) —ゲッベルス (Paul Joseph Gebbels) の秘書を務めた、ドイツ語圏メディアにおいては正に „Mitläuferin“ <sup>3)</sup> と形容されている女性のドキュメンタリー映画—を主な手がかりとする。

中心人物であるブルンヒルデ・ポムゼル (Brunhilde Pomsel)<sup>4)</sup> 氏の、率直だが矛盾ある幾つかの発言に的を絞り考察する。その過程を通じて、断

罪ではなく、映画を観る筆者自身も、一人の人間としてポムゼル氏との共通点を自覚しつつ、歴史に学ぶという実践を、僅かながらでも試みたい。

ナチス時代に関連した文学、手記、伝記、歴史書、哲学書などの書籍や、映画は、極めて大量に存在する。

戦後ドイツ文学について述べるならば、ナチス時代そのものにフォーカスした作品や、その時代と戦後の状況との関連性に主題をとった作品が、ドイツ語圏以外の文学とは異なる特徴を形成してきた。その特性は、戦後ドイツ文学のなかに、一種の道徳的・倫理的規範をも醸成してきた。

同じドイツ語圏内であったとしても、国家の体制によって、その表象の仕方、あるいは時代の問題への対峙の仕方には差異が生じているが、その差異すらも、ナチス時代に関連した対応という意味では、戦後ドイツ文学の特殊性を形成する一要素となっていると言える。

戦後、直接的に〈負の遺産〉との対峙が問題であったのは、国家としては旧西ドイツであり、それはいわゆる「過去の克服」(Vergangenheitsbewältigung)と総称されるさまざまな方向への取り組みへと繋がった。共産主義体制下にあった旧東ドイツが、ドイツ語圏内では最も特異な状況にあったと言えるだろう。そうした国家体制も崩壊し、ドイツが再統一してから既に20年近くが経過しようとしている。第二次大戦終結からは73年、開戦から79年、そしてヒトラー(Adolf Hitler)の政権掌握からは85年の歳月が流れる。時代によって出版量の差こそあれ、ドイツ語圏内において、ナチス時代に何らかの形で関連している作品は、今日においても出版され続けている。

戦争の全体像や、ホロコーストの全体像、あるいはその時代のさまざまな立場の人々の人生を、一作品で描き切るのが無理であるように、それは多種多様な視点、人物設定、アプローチを用いても、なお絶えざる問いであり続けている。

上述のように、こうした傾向は文学に限ったことではない。

またそれはドイツ語圏に限った事柄でもない。ホロコーストが人類史上例のない犯罪であるだけでなく、ナチス・ドイツが欧州を中心に世界を蹂躪した結果、大量の移民、亡命者、難民を生み出したこともその要因であると考えられる。

ヒトラーをはじめとするナチス高官らの歴史資料、およびホロコーストに関連する書籍や映画は、今日でも、次々と出版、公開されている。これまで注目度の低かったナチス高官やその人物を取り巻く状況を、史実に基づいて描き出し、発掘する作業もなされている。

こうした流れのなかで、戦後、まず比較的早い時期に出版・公開されたピークがあり、そして近年、再び出版・公開数が増加していると、筆者は捉えている。後者は、第二次大戦を実際に体験した人々の、最後の証言の機会と重なると考えられる。

それを後押しするのは、時代は異なり、世界の様相も国々の力関係も大きく変化しているにも拘らず、現代のわれわれが直面している状況が、戦前との<類似>を示していること、およびそれに対する<経験者>自身による警鐘すら消えゆくという<危機感>であろう。

『ゲッベルスと私』に関しては、スイスを皮切りにヨーロッパ各国、アメリカやイスラエルを含む35の映画祭で上映され、概ね好意的な評価を得ている。そしてまた、監督自らが、この映画は決して歴史についての映画ではなく、むしろ現代についての映画なのだと発言し、<sup>5)</sup> またホロコースト生存者からも、ホロコーストの検討に重要な寄与をしたのみならず、アクチュアルな政治状況を眼前にして、現代と未来の世代に対する時代を超越した警告でもあると言わしめたように、<sup>6)</sup> 現代社会に対する警告・警鐘としての一貫した高い評価を得ている。

本小論では、こうした評価の要因は何かを問うことも目的である。評価の下地となるのは、この映画の描き方そのものとも関係があると考えられるため、映画の構成を検証し、そしてボムゼル氏の発言に光を当てる。

## 1. 映画『ゲッベルスと私』の構成

邦題『ゲッベルスと私』の正確な原題は、„EIN DEUTSCHES LEBEN“『あるドイツ人の人生』である。

制作はオーストリアのブラックボックス・フィルム & メディアプロダクション (BLACKBOX FILM & MEDIENPRODUKTION GmbH) により、そのプロダクションに所属する4名の監督による共同制作作品である。監督名はクリスティアン・クレーネス (Christian Krönes)・オーラフ・S・ミュラー (Olaf S. Müller)・ローラント・シュロットホーファー (Roland

Schrotthofer)・フロリアン・ヴァイゲンザマー (Florian Weigensamer) である。

映画公開と同時に日本で販売された映画パンフレットによれば、彼らは制作において、自分たちの役割分担を持たず、全員が同じ仕事をして、同じ責任を負うというスタンスを貫いたと説明している。制作の現場で民主的であることは非常に難しく、独裁的にした方が楽なことも多いが、手間のかかる民主的なプロセスを踏むことにしており、この映画では非常に効果的に作用したと述べている。<sup>7)</sup>

具体的には、4人それぞれ世代が異なり、異なる意見を持つことで、被写体も世代に合わせて話をしてくれたといい、例えば、一番年長のクレネス監督にポムゼル氏が語ろうとしないことを、最年少のシュロットホーファーに簡単に話してくれることがあった例を挙げている。そして結果的に、一人で監督をするよりも、多くの意見を得ることができると説明している。<sup>8)</sup>

つまり、被写体の側からしても、4人の監督が属するそれぞれの世代に応じて証言をする敷居が低くなり、製作者の側からはより多面的な情報を被写体から得ることができるという双方向の作用がそこに生まれる利点がある。またさまざまな世代間の意見によって揉まれた上で、一つの作品としてまとめる過程で、製作者側のある一つの見方に偏らない映像世界を作り上げることが可能なのだと考えられる。

本作は、ナチス・ドイツの国家啓蒙宣伝省 (Propagandaministerium) で1942年から1945年の終戦までの3年間、ナチス宣伝大臣ゲッベルスのタイプスト兼秘書として働いたポムゼル氏に対する30時間に及ぶインタビューを独白形式として113分にまとめたドキュメンタリー映画である。彼女はヒトラー時代とゲッベルスらを、その中枢近くで知る最後の生き証人であり、撮影は2013年、ポムゼル氏103歳時に半年ずつ2期に分けて撮影された。彼女が自身の人生を語る背景は黒一色であり、ポムゼル氏にクローズアップしたモノクロ映像からなる。インタビュー形式をとっているが、例えばクロード・ランズマン (Claude Lanzmann) の『ショア』 („Shoa“ :1985年) や、レニ・リーフェンシュタール (Leni Riefenstahl) についてのドキュメンタリー映画『レニ』 („The wonderful horrible life of Leni Riefenstahl“ :1983年) のように、インタビュアーのこぼれや姿が、聞こえたり映りこむことはない。ただし、BGMを排して証言に集中している点

では同様である。

厳密に言えば、この作品は、大別すると2種の映像によって成り立っている。一つは前述したボムゼル氏の独白映像、もう一つは、その独白と独白の間に挟まる形で映し出されるアーカイヴ映像群であり、いわばモンタージュ方式を採用している。

後者は、第二次対戦中に世界各国で制作されたニュースや教育、プロパガンダ映画等が主となっている。例えば、アメリカのニュース映画やドイツを滑稽に描くプロパガンダ映画、あるいはイタリアのニュース映像によるゲッベルスのベネチア訪問、ナチスに抵抗するポーランドの人々がナチスを揶揄するカリカチュアを描く姿をとらえた映像や、ナチ党のプライベート映像、ドイツの宣伝映画や、占領軍としてのアメリカによる非ナチ化教育の編集前素材などである。

これらは世界で最も第二次大戦中のアーカイヴ映像を保有するアメリカ合衆国ホロコースト記念博物館 (United States Holocaust Memorial Museum) に所蔵されるスティーブン・スピルバーグ・フィルム & ビデオ・アーカイヴ (Steven Spielberg Film and Video Archive) コレクションより、未公開かつオリジナルの映像を入手したものであり、世界初公開となる歴史資料映像である。<sup>9)</sup>

また、同種映像に分類されるものとして、更に以下の2種の映像もある。1) ゲッベルスの演説等のなかからの有名なことばに、引用符が付され、黒地に白抜き文字のみで映し出される映像、および2) ゲッベルスの演説の音声のみが聴こえ、画像上は「ヨーゼフ・ゲッベルスの演説 (Joseph Gebbels Rede)」の太字表記に続いて、場所や日付のみが、引用符を除いて1)と同様の形式で映し出される映像である。<sup>10)</sup>

アーカイヴ映像がドキュメンタリー映画の中に部分的に挿入される例は、アラン・レネ (Alain Resnais) の『夜と霧』 („Nuit et brouillard“: 1955年) や、エルヴィン・ライザー (Erwin Leiser) の『我が闘争』 („Mein Kampf“: 1960年) などにも見られる手法だが、『ゲッベルスと私』においては、ボムゼル氏の独白→アーカイヴ映像等の順で、規則的に2種の映像が並置されており、更に、音楽や色彩も削ぎ落とされているのが際立った特徴である。<sup>11)</sup> スティーブン・スピルバーグ・フィルム & ビデオ・アーカイヴからの映像のみに絞っても、19種のフィルムから22回の挿入がある。フィル

ム映像は数十秒のものから、長くても3分に満たない時間配分であるが、これに上述の1)・2)のゲッベルスの演説からの引用や音声のみの、黒字に白抜き映像が加わると、アーカイヴ映像に分類される時間は、実際は映画のなかで相当な時間数を占めるのだ。

多くの映画批評<sup>12)</sup>が指摘しており、また監督自身も言及していることだが、独白の間に挟まる資料映像は、いくつかはポムゼルの独白を跡づけるような役割や補完する役割を果たしている。しかし映画の進行とともに、独白と資料映像の間のずれは次第に広がり、最終的にはグロテスクなまでに、ポムゼル氏の独白や記憶と、史実との隔たりを表現することになる。

## 2. ブルンヒルデ・ポムゼル氏の独白

映画を一見したところでは、前宣伝通り、彼女は宣伝相ゲッベルスの秘書であったのは間違いのない事実だが、例えば前宣伝の映画チラシに記された「終戦から69年の沈黙を破り、ゲッベルスの秘書が独白する」といった表現から連想されるような、宣伝相で受け持っていた彼女の仕事についての具体的な回想はほぼない、と言っている。おそらく観客が鑑賞前に想像するのは、ヒトラーの秘書だったトラウデル・ユンゲ (Traudl Junge) のような例だろう。<sup>13)</sup> 直属の秘書として常にその傍らにおり、個人的な交流も絶えず持ったような秘書像を指すが、ポムゼル氏は確かにゲッベルスの秘書という立場ではあったものの、直属ではなく、個人的な交流というものは実際にはほぼ無いに等しい。

また第二に、ドイツ全土が日本の沖縄のような状態に最終的にはなったという史実の知識から想像される<悲惨な戦争>というイメージからはかけ離れた、無邪気と言っても良いくらいの生活の回想という印象を受ける。

実はこの印象がこの映画を特徴付け、また観る者である我々に、時代を超えて、個々人としての自分に対し、問いを投げかけることになる要素または核であるのだと筆者は考える。

ポムゼル氏の語りは、幼年時代の第一次大戦の開戦後、父親が召集されたこと、1918年(4年後)に無傷で帰還したことから始まる。父親の帰還後の生活については、当時ではそれがごく普通の家庭の様子であったわけだが、エーリヒ・フロム (Erich Fromm) やマックス・ホルクハイマー (Max

Horkheimer) の『権威と家族』<sup>14)</sup>を連想させるような、家父長制のもとに、子どもは体罰などを受ける厳しい躰を受けて育てられるものだった、という記憶を語っている。

「服従は、家庭生活のなかで定着していた。愛情や理解なんかでは立派にはならない。服従や少しのごまかし、それに嘘あるいは他の誰かに罪を押し付けること、そういうことが家庭の生活の一部だった。だから子供のなかに、本来はなかった性質が目覚めてしまう。」(10:05-09/10:30-11:00, S.20)

そのようにして育った結果、「私は当時とても勤勉だった。いつも私はそうだった。それは私のなかでずっと変わらないままだった。このプロイセン的な何か、この義務感のようなもの。少し従属する意識もあった。それは家族のなかですでに始まっていたのよ。」(11:01-11:40, S.25)

彼女は、さまざまな箇所、かつての自身らが受けた教育と現代との差異を語っている。現代の若者が自身の意見をしっかりと持っていることなどに対して、自分たちの子供時代は、家庭でも政治の話などは関係ないものとされていたことなどとひき比べている。

「ときどきじっくり考えてみることもあるの。かつて私が政治に無関心だったのは、ほんとうに自身を責めるべきことなのかと。逆に、その方がよかったのよ。若者の理想主義のなかでは一面だけに偏りがちで、それで、たちまち破滅してしまったかもしれない。」(18:18-18:39, S.30)

年頃になりハインツ (Heinz) というボーイフレンドができ、たまたま知り合いだった彼の紹介で、1939年ナチ党員ヴルフ・ブライ (Wulf Bley) の第一次大戦の体験を口述筆記するためタイピストとして職をえる。それをきっかけとしてナチ党に入党することを条件にラジオ局に就職することになり、職業婦人としてその時代には稀なほどの出世への道が始まる。

彼女は水晶の夜の衝撃を語り、同時に自分たちが全てを知っていたはずだと思われているが、全てはしっかりと隠されたまま進行しており、自分たちは実際に起きていることが何なのかは何も知らなかった、あの頃、ズデーテン地方 (Sudetenland) からやってくる人が増えていたが、そこに住むドイツ人の代わりにユダヤ人を送り込めば、彼らもやっと一つになれると信じていたし、説得力もあったとも語る。(45:57-46:06, S.52)

1942年に速記の腕が認められ、宣伝相の秘書になる。宣伝省で働いていた頃について、放送局で働いていたときの給与もよかったけれど、宣伝相の給与はさらに高額で、270 ライヒスマルクであり、さらに非課税の省勤務手当などがついてたと、103歳にして明瞭な記憶を語りもする。友人の中でも羨ましがられていた話や、上等の布地で服を仕立ててもらったこと、戦時中とは一見思えないような生活だが、そうやって楽しんでいたのだと、明快に語っている。(39:15-41:39, S. 74 f.)

「とにかくちょっとしたエリートだった。そこ（宣伝相：補足は筆者による）で働くことはとても楽しかったから。すべてが快適で、私の気に入っていたわ。身なりの良い人たちで、親切な人たち。ええ、あのときの私は本当に浅はかだったのね。とても愚かだったわ。」(52:53-53:25, S.74)

親しかった友人の中で唯一のユダヤ人であったエーヴァ・レーヴェンタール (Eva Loewenthal) について度々、言及しているが、宣伝相に勤める頃になってもまだ付き合いがあったこと、コラムニストとしてなんとかしのいでいたエーヴァは、もともと貧しかった上に更に困窮した状況に陥っていた様子が語られる。

そしてラジオ局に遊びに来ていた過去のように、ポムゼル氏の職場にまた遊びに行きたいと言われると、今はゲッベルスのオフィスで働いているので「もう来ない方がいい」と断ったこと、そしてこれに続いて「エーヴァはまだ自由だった。」とカメラを直視して明瞭に語っている。(01:17:19-01:18:37, S.66)

この後に、映画ではカットされているが、書籍では「あれは1942年だったはず」(S.66) とのことばが続く。

史実を知る者にとっては、この発言は決定的な矛盾を抱えていると即座に気づくだろう。ユダヤ人の迫害はヒトラーが政権を掌握してから矢継ぎ早に始まっている。1935年にはニュルンベルク法が制定され、ユダヤ人から公民権が剥奪されている。1941年にはドイツのユダヤ人には「ダビデの星」の着用が義務付けられ、41年10月からはベルリンの西部グルーネヴァルト (Grünwald) 駅からユダヤ人の東方移送が開始された。『アウシュヴィッツと<アウシュヴィッツの嘘>』の著者ティル・バステイアン (Till Bastian) は、「1941年にドイツのあちこちの都市からユダヤ人が移送



された際の多くの写真には、通りを埋める野次馬の人垣が写っている。」<sup>15)</sup>と述べている。ポムゼル氏の歴史認識には明らかなる誤謬がある。

この独白の後に、アーカイブ映像の中の「注意！極秘指令」（„Achtung! Geheime Kommandosache“: 01:18:40-01:21:07）が挟まれる。ポーランドのゲットーの内部の様子が映し出され、痩せこけた男女の死体が滑り台のようなものを使って地中に落とされるシーンが流れる。独白とアーカイブ映像の溝は、ポムゼルの知らなかった、あるいは映画評の中でも度々触れられているように、彼女が見ようとしなかった現実と彼女の認識の乖離を巧みに表現している。

彼女は、戦後、ソ連に5年間抑留され、帰還してからユダヤ人の迫害について初めて知った（01:38:33-01:40:00, S.113）と述べているが、多くの批評が指摘している通り、この言葉を字義通りに受け取るのは無理がある。彼女は他でもない宣伝省に務めていた。一方で、彼女はその宣伝省でソ連兵のドイツ人女性へのレイプ被害の水増し操作などの情報操作を行っていたこと（01:21:20-01:22:50, S. 90）を証言している。宣伝省大臣官房は、さまざまな情報が集中する場であり、そこで国民に知らせるべき事柄とそうでない事柄を選別するといった、戦時中、どの国家も行っていた一種の情報戦略を、まさしく決定し、実行に移す機関である。ホロコーストに関する情報が集積されなかったはずはない。

またポムゼル氏は自身の過ちは率直に認めているが、「自身に罪はない」とさまざまな箇所で明瞭に発言している。何度か繰り返されるその言葉の中に、アイヒマン（Adolf Otto Eichmann）に対するアーレント（Hannah Arendt）の「悪の凡庸さ」<sup>16)</sup>と同じものを感じる側面もある。映画の原題も、アーレントを背景に思い浮かべるような選択をしていると捉えられる。

確かに立場は明確に異なっている。アイヒマンはユダヤ人の東方移送の担当であり、ヴァンゼー会議にも出席し、ホロコーストに直接関わった人物である。終戦間近、ヒムラー（Heinrich Luitpold Himmler）の移送中止の命令に従わず、ハンガリーから徒歩でウィーンまでユダヤ人を歩かせる、死の行進と知った上での命令を下した張本人でもある。その彼が「命令に従っただけ」と答えるのと、ポムゼル氏が「ドイツ人全体に罪があるというのなら話は別」だ、自分は直接的にだれかを貶めたわけでもない。当時

の選択を軽率で愚かだったと認めるけれども、自分にはホロコーストに対する罪はなかった (01:36:05-01:37:19, S.115), と言い切るのは、アイヒマンのそれとは大きな隔りがある。

しかし、実際は彼女のようにノンポリで、自身の目の前の生活や保身には敏感であり、無自覚であったとしても、危険が及ぶ可能性を察知していたからこそ、宣伝省のなかで扱われている情報にも目を瞑り、また友人のユダヤ人であるエーヴァが消えたことにも心は揺れたかもしれないが、目を瞑り続けたような人々こそが、熱狂的なナチの信奉者よりも、より盤石なナチスの政治的基盤と、ホロコーストへの道を用意してしまったと言えるのである。

彼女は白バラの抵抗運動についても何度も触れている。彼らが見せしめにギロチンにかけられたことを極めて残酷だと振り返る一方で、宣伝省で白バラ事件が扱われた際に、まさしくその書類を「なかを見ないように」と言われて上司に手渡されたこと、そしてなかを見たくてたまらなかったが、自分の仕事や自分が信頼されている以上、それを裏切らなかったし、なかを見なかった自分に誇りを持っている (01:05:16-01:07:33, S.89f.) とも語っている。

友人のエーヴァについても、「エーヴァはいつも私たちと同じテーブルにいた」「彼女のことは決して私の頭から離れなかった」と語りながらも、ポムゼル氏は 2005 年になって初めて彼女の足跡を調べに出向き、1943 年にアウシュヴィッツへ移送され、45 年に死亡したことを知った (01:42:06-01:43:36, S.120f.) と述べている。

それは東方へ移送されるユダヤ人をただ見物していた野次馬の人々と同様に、移送されるユダヤ人のその先に何が待ち構えているのかある程度の推測がついたとしても、見ないようにするのと同じ処世術に基づいた行動だと言えるだろう。「何も知らなかった」という状況の前には「知ろうとしなかった」という行動と選択があるのだ。

彼女は犯罪者の極めて近くにいた稀なケースの、しかし典型的な Mitläuferin であると言えるのだろう。若い頃の過ちは認めても、自身の過去への内省を避けたまま、その処世術で、困難な時代を生き延び、人生の終盤を迎えた、ある意味、典型的なドイツ人の姿であり、映画の原題 „EIN DEUTSCHES LEBEN“『あるドイツ人の人生』は、正しくそれを表し

ているのだ。

ポムゼル氏の回想は、当時の人がいかにしてナチスに同調したのか、その心境や振る舞いを教えてくれる意味で、現代の私たちへの警鐘となっている。そして、彼女の証言から、われわれのだれの中にもある、自分の出世や保身や物質的な余裕やまた安全を優先したい気持ち、そしてそれを第一に考えるがために、社会の不公平や社会的弱者への不正もしくは不当な扱いを、見ないようにしてしまう姿勢がその発端であることを教えてくれる。見ようとしない、知ろうとしないことによって、他者への抑圧や迫害はなかったかようになってしまうという恐ろしさもそこには存在している。普段は良い人であったとしても、また良心的でもあったとしても、むしろ自身が良心の苛責に苦しまなくて済むように目を瞑ることによって、無意識的かもしれないが、不公平や不条理を受け入れてしまう人が、いわゆる *Mitläufer* なのだと、改めて理解する。確かに、のちに戦犯とされたような人々とは一線を画している。しかしむしろ数え切れないほどのポムゼル氏のような存在が、急進的で過激な行動をとる人々の盤石な土台になってしまっていることの方が、恐ろしい現実であることにも気づかせてくれる。

*Mitläufer* は単複同形である。それは物言わぬ塊のようなものではなく、一人として同じ人物はいない個々人を表すと同時に、彼らの同調形態をも表すことばであると考えられる。

個々人が自身の属する世界の現実から目をそらさず、個人としていかなる責任を負うのかを意識しなければ、<歴史は繰り返す>可能性が高いことを改めて考えさせられる問題である。

## おわりに

昨今、金融危機や難民の大量流入などさまざまな理由から、欧州では急速に右傾化が強まり、またポピュリストが支持を広げつつある。欧州に限ったことではなく、アメリカもそしてこの日本も、それぞれ異なる要因によるとしても、同様の傾向を目の前にしている。さまざまなメディアでは「戦前回帰」という言葉が頻繁に用いられるようになった。

ファシズムや独裁主義的・権威主義的支配や、そのような傾向を持つ社会において、一部の人々をスケープゴートにする差別やマイノリティへの

不当な行為などを、われわれはどこかで<過去のもの>と習い覚えたようにみなしつつ、しかし同時に現代社会のなかに並存している事実の双方を、眼前にしている。

ドイツ語圏に関係のある事柄を専門にする研究者や学習者には、Mitläuferということばは、多くは戦後の、とりわけ西ドイツ社会を特徴付けた「過去の克服」を連想させるものであると考えられる。そして「過去の克服」自体が既に<記憶>の問題となりつつある現代においては、研究対象として<古い>と見る場合もあるかもしれない。

しかし、前述のように、現代社会においても<歴史は繰り返す>という不安を喚起させる状況が眼前に広がっていることを否めない以上、過去に起きたことや語られたことは常にアクチュアルな問題であり続けるのである。

それゆえにこそ、2000年前後から現在に至るまで、再びナチス時代と関連のある作品が、文学の領域においても、映画においても、さまざまな側面から取り上げ続けられているのだと考えられる。生き証人による最後の声として。

ところで、この映画の構成と4名の監督による製作過程について上述したが、映画の構成は、いわば現代小説に見られる手法と同様の手法を用いていると、筆者は考える。

史実に基づく映画でも、ドラマ仕立てで実際の歴史の再構成を試みようとする場合、そこには脚本家がいるのであり、後世の人によって手を加えられた側面が必ず存在する。小説世界では、例えそれが実話を扱っていたとしても、その時その時に、実際に話された言葉を一字一句再現することは不可能であり、時代の雰囲気や完全に再現できるか否かは、作家の力量にかかっている。そして、19世紀的なリアリズム小説がことばで絵画のように世界を描こうとした行為が、どこまでいっても擬似現実のなかで円環を閉じようとする方法であるように、脚本を介し、物語として提示された映画は、手法としてはほぼこの方法に類似していると言えるだろう。

ポムゼル氏の発言を繋げることのみでも、彼女の率直な発言のなかに矛盾を見ることは可能だが、記憶とは曖昧なものであり、自身が生きていく上で、確かだと思っている記憶も、変容を遂げることもある。この『ゲッベルスと私』は、ポムゼル氏の語りだけでは無く、その時代に作成された

オリジナルのアーカイブ映像を挿入することによって、意図的に更に彼女の語りを物語化させない装置のような役割を果たしていると考えられる。現代小説が、虚構性を開示したり、擬似現実の層を揺らめかせるような実験的な方法を採用することによって、読者がカタルシスを得るだけでは無く、読者に思考させる仕組みを持つと同様の作用を、筆者はそこに見る。

映画としては、監督側の質問などの声が挟まらないことも、映画の見方を視聴者に方向付けしない意味でも重要な要素の一つであろう。更に、4名の監督による複数の意見によって編集・構成が成されることによって、恣意性には何重かのチェックが入ることになる。

これらの要素が混ざり合うことによって、ポムゼル氏から見た記憶や彼女のなかの真実と現実や真理のずれを浮き彫りにし、彼女があるところでは否定していることを、またあるところでは認めてしまっているその矛盾を際立たせることにつながっているのだと考える。この映画の評価が高い理由はそこにあるのだと言えるのではない。

邦題の『ゲッベルスと私』には、原題とはまた別の意味が込められている。この「私」とはあなたのことでもある<sup>17)</sup>と監督らは述べる。

この映画に対しては、「現代に対する警告・警鐘」という側面で評価されていることは上述した通りである。しかし、その様な評価を前にして、更に自身や個人について踏み込んで考えてみる必要があると感じる。

例えば、ジャーナリストや映画監督が、現代社会が抱えるマイノリティの問題を論じたり、主題とした作品を製作していたとしても、実生活において、セクシャル・ハラスメントなどを行っていることがないのかと虚心に問うてみると、それは論評や作品では表には見えてはこない事柄であるのも事実だ。自身も含めて、社会的な問題意識を持ち、それに携わっているという意識から、研究者、批評家あるいはある種の社会運動を展開する人々は、自身はマイノリティの側に立っていると捉えやすい傾向があることも否めないだろう。自身もポムゼル氏のようになる可能性がある、と自覚すること、「私」という存在をポムゼル氏と切り離さないで考えるということは、社会的な大きな枠組みの問題だけではなく、日常生活の足下の問題から自身を切り離さないことでもあるのではないか。筆者が属する研究者の世界について考えるならば、起こっている事柄に対する批評家ないしは外から遠巻きに見るのみの傍観者に留まってしまう傾向や危険性、あるいは

は足下の問題とは異なる問題に携わり、無意識的に代償行為をとって、身近なところで起きている問題を無視してしまう可能性を孕んでいるのではないか、ともすれば抑圧者や加害者にすらなる可能性を持っているのではないか、と改めて考える。筆者自身も、あそこで証言しているのは「私」である可能性がある、との危機感を持ち、高みから語るのでも、大きな問題だけに関心を持つのもなく、足下の身近な差別や偏見、不条理などに対し、意識的でありたい、またそうある必要があるのだと、自戒を持つことが重要なのだと思う。なぜなら、保身や他者の面倒ごとに巻き込まれることを望まない心理は、日常生活のなかで常にどこでも働くものであり、人間が複数集まれば、どんな組織のなかでもいつでも存在することだからである。そして意識的でないければ、歴史の一場面になるような重大な事柄に対してはなおのこと、同様の対応によって悲劇を生むかもしれないのだから。

#### 注

- 1) Krönes, Christian/ Müller, Olf S./ Schrotthofer, Roland/ Weigensamer, Florian (Regie) / Weigensamer, Florian (Drehbuch) / Pomsel, Brunhilde (Darsteller) (2017) : *Ein Deutsches Leben*. [DVD], Österreich, Deutschland: Salzgeber & Co. Medien GmbH.

日本国内でこの映画が上映中であることから、日本語字幕版のDVDはまだ発売されていない。配給会社に確認したところによれば、2019年中には発売を予定しているとのことである。尚、本作品には、映画公開と並行して刊行された同名の書籍が存在する。これは政治学者、社会学者であり、ジャーナリストであるトーレ・D・ハンゼン (Thore D. Hansen) 氏が、2013年に収録されたポムゼル氏の回想を土台として、彼女の語った内容を、映画では使用されなかった箇所も含め、年代順に並び替え、言葉の文法上の修正などの編集作業を施し、更には論文といっても過言ではない長文の解説が付して出版されたものである。以下に書籍について記す。Hansen, Thore D.: *Ein Deutsches Leben: Was uns die Geschichte von Goebbels Sekretärin für die Gegenwart lehrt*. 1. Aufl. Berlin · München · Zürich · Wien (Europa Verlag) 2017. 劇場で観た数回の映画の記憶からでは不確かであるため、ポムゼル氏の独白の引用にあたっては、上記DVDと共に、それを補完するものとして上記

書籍を参照し、訳語は日本上映中の字幕表現とは異なり、筆者によるものとする。映画からの引用は以下、本文中にDVDにおける時間と、上記書籍の頁数を記す。書籍のみからの引用は本文中に頁数のみを記す。訳出に際し、日本での映画公開と並行して上記ハンゼン氏の書籍の邦訳を参照させていただいた。邦訳書については下記の通り。ブルンヒルデ・ポムゼル トーレ・D・ハンゼン 石田勇治監修 森内薫 赤坂桃子訳：ゲッベルスと私 ナチ宣伝省秘書の独白 紀伊国屋書店 2018。

尚、引用符等の規則は『『リェンコイス』執筆要領』に従うが、改めて以下について整理しておく。作品名等の表題は日本文の場合『 』で表し、作品等からの直接引用やテクニカルタームとして通用している文言には「 」を用い、< >は筆者が独自に強調する用語に用いることとする。

- 2) 『ブリキの太鼓』 („Die Blechtrommel“, 1959), 『猫と鼠』 („Katz und Maus“, 1961), 『犬の年』 („Hundejahre“, 1963) を指す。三作はそれぞれ独立した作品だが、主たる舞台がグラスの生まれ故郷であるダンツイヒ (Danzig: ドイツ語名, 現ポーランド領グダニスク: ポーランド語表記 Gdańsk) であり、時代背景、主題上の共通点、登場人物の一部重複などの共通項より、この名が与えられている。後に、三作を合本し、『ダンツイヒ三部作』の名で独立して出版もなされており、最も初期のものは以下である。Grass, Günter: Danziger Trilogie. Die Blechtrommel. Katz und Maus. Hundejahre. Gebundenes Buch – Ungekürzte Ausgabe, Hrg. von Walter Göttlich u. Alfred Mümmler. München (Luchterhand Verlag) 1980.
- 3) ポムゼル氏を Mitläuferin と形容している映画評は枚挙にいとまがないため、以下、筆者が参照した順に主たるもののみを挙げる。Tilman, Christiane: Eine Mitläuferin, die nichts gewusst haben will. Neue Züricher Zeitung Online, Rubrik: Feuilleton, 28.06.2017, auf: <https://www.nzz.ch/feuilleton/ein-deutsches-leben-eine-mitlaeuferin-die-nichts-gewusst-haben-will-ld.1303137>, Stand 16.06.2018  
Krist, Martin: Filmrezension: „Ein deutsches Leben“ - ERINNERN: NATIONALSOZIALISMUS UND HOLOCAUST. \_erinnern.at\_ Netzwerker in Wien Online, Der Text von Martin Krist erschien zuvor in: ZWISCHENWELT. Zeitschrift für Kultur des Exils und des Widerstands. 34 Jg., Nr. 1, 2017, auf: [http://www.erinnern.at/bundeslaender/oesterreich/e\\_bibliothek/File%20und%20Fotos%20im%20Unterricht/filmrezension-201eein-deutsches-leben201c](http://www.erinnern.at/bundeslaender/oesterreich/e_bibliothek/File%20und%20Fotos%20im%20Unterricht/filmrezension-201eein-deutsches-leben201c), Stand

16.06.2018

VIENNA.AT: Ein deutsches Leben - Trailer und Kritik zum Film. VIENNA.AT Online, KINO-NEWS UND KINOTRAILER, 5.04.2017 (Akt. 6.04.2017 13:22), auf: <https://www.vienna.at/ein-deutsches-leben-trailer-und-kritik-zum-film/5221297>, Stand 16.06.2018

Oßwald, Dieter: Ein deutsches Leben - A German Live. Programm kino.de, Kinomagazin der deutschen Arthouse- und Programmkinos Online, FILMKRITIK, auf: <https://www.programmkino.de/content/Filmkritiken/ein-deutsches-leben-a-german-live/>, Stand 16.06.2018

Grisse mann, Stefan: Kino: Ein umstrittener neuer Film porträtiert Goebbels' Sekretärin. Profil.at Online, auf: <https://www.profil.at/kultur/kino-film-goebbels-sekretaerin-8065624>, 5.4.2017, Stand 16.06.2018

Günter, Inge: „Ein deutsches Leben“ Lieber hat sie nicht zugehört. Frankfurter Rundschau, FD.de E-Paper, Rubrik: Kultur/Kino, 15.07.2016, auf: <http://www.fr.de/kultur/kino/ein-deutsches-leben-lieber-hat-sie-nicht-zugehoert-a-323564>, Stand 01 August 2018

Kürten, Jochen: Goebbels Sekretärin hat nichts gewusst: „Ein deutsches Leben“. Deutsche Welle, DW.COM, Themen: Kultur/Filme, 30.01.2017, auf: <https://www.dw.com/de/goebbels-sekret%C3%A4rin-hat-nichts-gewusst-ein-deutsches-leben/a-19370412?maca=de-tagesschau-film-1526-rdf-mp>, Stand 01 August 2018

日本語においても「同調者」と明確に記載されているのは以下による。クリスティアン・クレーネス, フロリアン・ヴァイゲンザマー, 中村一成: インタビュー『ゲッベルスと私』監督たちに聞く「見て見ぬ振り」を繰り返さないために 世界 (911) 2018. 240-246 頁。

- 4) ポムゼル氏について簡単に経歴を述べておく。1911年1月11日ベルリン生まれ。1929年弁護士で保険代理店を営むユダヤ人のゴルトベルク博士の下で働き始め, 1939年ナチ党員ヴルフ・ブライの第一次大戦の体験を口述筆記するためタイピストとして職をえる。ブライの推奨によりナチ党に入党しラジオ局に就職する。1942年にゲッベルス宣伝相の秘書となる。(終戦までタイピスト兼秘書だったことは前述の通り。)終戦後, ソヴィエト軍に捕らえられ1950年まで5年間ソ連の強制収容施設となったブーヘンヴァルト収容所やザクセンハウゼン収容所に抑留される。1971年の定年退職までド



- イツ公共放送連盟 ARD (ポムゼルが当初勤めていた SWF 南西ドイツ放送局と他の放送局が合併し 1950 年に ARD が開局) で働く。2017 年 1 月 27 日、ミュンヘンの老人ホームで死去。享年 106 歳。
- 5) 有田浩介編：「クリスティアン・クレーネとフロリアン・ヴァイゲンザマー監督とのダイアローグ」 岩波ホール創立 50 周年記念作品『ゲッベルスと私 A GERMAN LIFE』映画パンフレット サニーフィルム 2018. 12 頁。
  - 6) Hansen, a. a. O., S. 6.
  - 7) 有田：前掲書. 11 頁。
  - 8) 前掲書. 11 ~ 12 頁。
  - 9) 前掲書. 16 ~ 17・29 頁。左記には、「アーカイブ映像・音声の入手先」として、本文中に記した場所の他、アメリカ議会国会図書館 (Library of Congress)、アメリカ国立公文書記録管理局 (National Archive and Records Administration) そして DRA ドイツ・ラジオ・アーカイヴ (Das Deutsche Rundfunk Archive) がクレジットされている。また、16 ~ 17 頁には、使用された各アーカイヴ映像の 1 コマが写真として掲載されている。尚、インターネット上のドイツ語・英語を主とする当該映画のホームページには、日本以外の各国でのプレミアムに製作されたプレス・キットがダウンロード可能であり、注 5) に記載した日本語版の映画パンフレットと内容は異なるが、国際版パンフレットに相当する資料の PDF 版が存在し、アーカイブ映像・音声の出典は下記においても確認できる。BLACKBOX FILM Präsentiert: Download Press Kit ger.: EIN DEUTSCHES LEBEN: <http://www.a-german-life.com/de/presse/>, [http://www.a-german-life.com/wp-content/uploads/2017/02/EPK\\_EDL.pdf](http://www.a-german-life.com/wp-content/uploads/2017/02/EPK_EDL.pdf), Österreich 2017. S. 14/22.
  - 10) 同上。ゲッベルスの演説からの引用および演説音声についての明確な出典の別は日本における映画パンフレットでも、国際版プレス・キットにおいても明示はない。
  - 11) 有田：前掲書. 25 頁。左記にて、渋谷哲也氏も同様の指摘をしている。
  - 12) 極めて多数の映画評が存在するため、以下、参照したなかで主なもののみを記す。Paul Garbulski: Gib acht vor der Nazi-Sekretärin in dir. VICE-Kanäle Online, 18. August 2016, auf: <https://www.vice.com/de/article/ex8jdz/sind-wir-nicht-alle-ein-bisschen-pommesel>, Stand 31.07. 2018  
Tel Aviv/Wien (bmeia) : „A German Life“. Österreich Journal Online Magazin,

Die Nachrichten-Rubrik „Österreich, Europa und die Welt“, 18.07.2016, auf: [http://www.oe-journal.at/index\\_up.htm?http://www.oe-journal.at/Aktuelles/!2016/0716/W2/11807AbmeiaTelAviv.htm](http://www.oe-journal.at/index_up.htm?http://www.oe-journal.at/Aktuelles/!2016/0716/W2/11807AbmeiaTelAviv.htm), Stand 31. Juli 2018

Hermanski, Susanne: Filmfest München „Ich könnte keinen Widerstand leisten, ich bin zu feige“. Süddeutsche Zeitung, SD.de Zeitung Magazin Online, auf: <https://www.sueddeutsche.de/muenchen/fimfest-muenchen-ich-koennte-keinen-widerstand-leisten-ich-bin-zu-feige-1.3058230>, Stand 06.08.2018

von Mutius, Franziska: Die sehr späte Reue von Nazi- Sekretärin Brunhilde Pomsel (105) | „Goebbels war ein großes Schwein“. Bild, Bild.de. Online, auf: <https://www.bild.de/regional/muenchen/nazi-schergen/spaete-reue-46584932,var=a,view=conversionToLogin.bild.html>, Stand 06.08.2018

dpe: Sekretärin von Goebbels im Film: „Nichts haben wir gewusst“. Schwäbische Zeitung, schwaebische.de Online, auf: [https://www.schwaebische.de/sueden/bayern\\_artikel,-sekret%C3%A4rin-von-goebbels-im-film-nichts-haben-wir-gewusst-\\_arid,10480109.html](https://www.schwaebische.de/sueden/bayern_artikel,-sekret%C3%A4rin-von-goebbels-im-film-nichts-haben-wir-gewusst-_arid,10480109.html), Stand 06.08.2018

Kellerhoff, Sven Felix: Holocaust: Goebbels-Sekretärin will „nichts gewusst“ haben. WELT, welt.de Online, auf: <https://www.welt.de/geschichte/zweiter-weltkrieg/article156710123/Goebbels-Sekretaerin-will-nichts-gewusst-haben.html>, Stand 07.08.2018

dpe: Goebbels-Sekretärin im Film: „Nichts haben wir gewusst“. Berliner Zeitung, berliner-zeitung.de Online, auf: <https://www.berliner-zeitung.de/kultur/goebbels-sekretaerin-im-film---nichts-haben-wir-gewusst--24320984>, Stand 12.08.2018

dpe/n-tv.de: Goebbels Sekretärin: „Nichts gewusst“. ntv Nachrichten Online, auf: <https://www.n-tv.de/politik/Goebbels-Sekretaerin-Nichts-gewusst-article18085321.html>, Stand 12.08.2018

Kamalzadeh, Dominik: “A German Life”: Erinnerungen von Goebbels’ Sekretärin. Der Standard, derstandard.at Online, auf: <https://derstandard.at/2000035080569/A-German-Life-Im-Vorzimmer-der-Despotie>, Stand 12.08.2018

- 13) トラウデル・ユングに関しては、ポムゼル氏と類似点がある。ユング氏については彼女の手記と映画が存在し、それに詳しい。以下、参照した手記と映画について記す。Junge, Traudl: Bus zur letzten Stunde: Hitlers Sekretärin erzählt ihr Leben. Unter Mitarbeit von Mellisa Müller. Ungekürzte Ausgabe im

List Taschenbuch. 8. Aufl. von 2011 in München-Zürich (Propylaen Verlag, Zweigniederlassung der Ullstein). München (Ullstein e Books. Kindl Edition) 2012.

ヘラー, アンドレ & シュミーデラー, オトマール (監督) / ユンゲ, トラウデル (語り) (2006) : *IM TOTEN WINKEL. Hitlers Sekretärin*. [DVD], (Heller, André & Schmiderer, Othmar (Regie) / Junge, Traudl (Darsteller) (2002) : Österreich: DOR FILM.) ヒルシュピーゲル, オリバー (監督) / (2006) 『ヒトラー～最後の12日間～』エクステンデッド・エディション<終極Box>, [DVD] 東京: 日活。

- 14) Holkheimer, Max: Veröffentlicht als >Allgemeiner Teil< des Sammelbandes Studien über Autorität und Familie, Hrg. von Max Holkheimer, Paris 1936.
- 15) Bastian, Till: *Auschwitz und die 'Auschwitz-Luege': Massenmord, Geschichtsfaelschung und die deutsche Identitaet*. München (C.H.Beck) 2016, S.16. 尚, 連行されるユダヤ人と「野次馬」の例として, 17頁にはすでに1938年にバーデン・バーデンで撮影された写真が掲載されている。
- 16) Arendt, Hannah: *Eichmann in Jerusalem : ein Bericht von der Banalität des Bösen. mit einem einleitenden Essay und einem Nachwort zur aktuellen Ausagabe von Hans Mommsen*. München/ Zürich (Serie Piper), 2011.
- 17) 有田: 前掲書. 12頁。